

【右】

小團次

まこと「わたくしも皆様のおかげで

まいごしたものでおちほはつら

ますがじだいにかけては

今少しせいがひくいので

由良の助や政

右衛門ははまり

かねます

もつ少し

せいをたかくねがひ

ますついては

小文次めもわたくしどう

やう小兵でこまり升トねがつたり

いしや

夫ではたかい下駄をはいてながいきものをまゐるがよい

九蔵

「ごにわたくしは内外のなをびやうで

）六あきのため読めない（も四四四病のやまひりうしうごと申した

くりらぬいつか此ふりかたはばいりりますまごか

いしや

夫はおれの手ぎはにも行ぬから高しまやにまかなひをたのんだら又いんしあなもあつら

福助

みなさまがわたくしのかほは今ひつこきあごきやうが

なういおししやるかあかめめをいんしあなかひつこ

かめいぎやうを出しておまらひ申したうぞんじます

いっせ

かほのめいぎやうはとまかくませりなまはしにまつて気をつけたらよからう

三津五郎

どうもわたくしは生れついでの大あはた元をつめるには第一

おしろいも多分入ますどつかおりやうじをねがひます

【中】

いっせ

おはだは釜入湯をわかつてかほをむすとぶや

けるからたちまちめばたはなをりもしよつが

おまへのやうにぶたいをすてゝゐてはむかし

のだてものは夫でもよいが当時は高

しまやがよい手本よほど一生けん

めいにならなくては田の太夫の

前へは出られぬ〜

彦三

ヲイ八百さんあんまり

おまへはしやうん

すだていつそ

からだがきこん

ちないもつ

少しぶたいが

丸くなければ

いか様からおいら

がどしやでもかけてやうじ

これについてぶたいをつとめるのがすきでねてゐてさへも片時でもぶたいの
ことをわするゝひまはなく夫に兄きや座がしらはあの通りのほと

(裁断のため読めない) (りものわたしてもみんしちへいかなごやマキ屋になりま
せん

なるほど夫もそうで有つが十分はかけるといふからチ下紫若

大夫と当ぶんにしたら丁度よいやくしやができるであらう

おまへのからだのいくのと紫若大夫のいくかぬのとツツき

ませてしかし紫若の愛嬌をちつとわけてやりたい

(裁断のため読めない) (りやゝふたり当ぶんにしてよいやくしやを「しては」てせ
う

(鶴蔵

(裁断のため読めない) はくちゆへにくまるんたやひじも私はくはがすがすのど

(裁断のため読めない) ざりますどいぞおりやうちをながひます

口ぢはわざはひのかど夫ゆへ亀旦那の所へわびにでもいかねは

ならぬほかにまじなひもないゆへくちでもしはつてゐたらよからう

(権 (十郎

(裁断のため読めない) うも世の中も面白くない一座をせめつちは高羽やの

(裁断のため読めない) きは名人だと思つたが二年もつて見るとかへへつな

(裁断のため読めない) はない盆世かいにいひほどもはす

なご思ひんそりへはながつかへてなりませと

(裁断のため読めないが 役者の顔ぶれから「訥丹」か)

世の中にゐるほひはながし

ひしきよのぼがッおきて

だうくで朝霞

ほひよごまのほなご

をしほしつまに

(裁断のため読めなご) とめなご

しかつかつぼと

やうこつるぢやア

しきよがわたらねなごんぞ

おしやうじをながひ丹

いごせ

とつがらしてもたべてみたら少しは

気がはつきりしよしもこれぬ

家橋

わたしのことをいせつくの何のト申升がたとへ大夫元でもぎがしらでも

ながはしやでしよごいますからここのひくいほつがよろしからうとぞんじ升が

外によい御丁風がムリ升ウが

いごせ

夫は戀嬌をうる家業だからでいせもここのひくいのがよいけれどもものにはわしず

のありものともかくも旦那とよはるゝ弟ぶん同じ役者でもちがふ身がらゆへあまり

(かすねのため読めない) すぢの野だすぢは少しも見合わせなぞなませしかじぶた

いにてんの打所はムリま

せんロク々へいせいのとしまはしが余りにせつき下申スので有つおまへも訥升とでも当分に

したらよかからう

(鷹) 八

おごらのこのとをやらめがながつてゐるの何のと口やかましていふので御多数や娘ツのひ

めぎが

おちやつかとおいしや様 (虫食いにて読めない) たらはおもいれねをつめてかみを

ゆへをいつたがこれじやア亡人の文樂のやつになつた